

幼稚園教育実習における学習内容の検討

—実習園との連携に向けて—

真下 知子、小林 君江

保育者養成にあたり、実習と大学での学びの往還が極めて重要であり、大学での教育内容や方法を検討していく上で、実習を通じた現場での学びとの連動を意識することが不可欠である。そこで、幼稚園教育実習Ⅱが終了した時点において、学生が経験した実習中の学びや活動に関するアンケート調査を実施した。本稿では、実習における学びの現状を報告するとともに、今後の改善点や実習園との連携の在り方について考察した。

キーワード：保育者養成、幼稚園教育実習、学習内容、実習園との連携

1. はじめに

本学の幼児教育学科では、1年次後期（2月）に幼稚園実習Ⅰ、2年次前期（6月）に幼稚園実習Ⅱを各10日間、計20日間実施している。幼稚園教諭の養成にあたり、実習と大学での学びの往還が極めて重要であり、大学での教育内容や方法を検討していく上でも、実習を通じた現場での学びとの連動を意識することが不可欠である。文部科学省（2005）では、教育実習を実習園任せにせず、大学の教員と受け入れ園の指導教諭が連携して学生の指導にあたり、教育実習の一層の改善・充実を図ることを求めている。しかし、実習先での学習は、受け入れ先の園にある程度委ねられており、実習園によって実施内容や指導方法に差が生じていると考えられる。その実習内容は、指導教諭が自身の実習生時代の経験をもとに指導を行っていることが多く、長年にわたり実習指導の方法が継続され、変化が見られないという指摘もある（渡邊、2021）。理論と実践のサイクルを充実させ、学生の学びをより意義あるものにするためには、大学が実習先での学習や活動内容を把握し、それを理論

と繋げられるような教育方法を検討することが必要である。また、学生に体験させたい内容やその実施方法について実習先に提案し、協力を求めることも必要であろう。そこで、筆者らは幼児教育学科2年生の実習Ⅱ（6月）が終了した時点において、実習中の学びや活動に関するアンケート調査を実施し、現状を報告するとともに、今後の実習園との連携の在り方について考察した。

2. 調査の目的と方法

幼稚園教育実習における学びや活動の実態を把握し、大学での学習内容・方法の改善および実習園との連携の在り方を検討するため、本学、幼児教育学科2年生を対象としたアンケート調査を実施した。調査内容と方法を以下に示す。

(1) 調査の対象

幼児教育学科2年生、教育実習総論Ⅱの受講者103名

(2) 調査の実施方法

調査の方法：15 回目の授業終了後に、Google フォームにより実施

調査の期間：2022 年 7 月 20 日から 8 月 1 日

倫理的配慮：回答は無記名で行い、得られた結果は、個人が特定されないよう処理されること、成績とは無関係であること、研究の目的と意義について事前に説明した。また、研究の成果が学会での発表や論文等で公表される際にも、個人が特定される形でデータが示されることはないことを伝え、同意と理解を得た。なお、本研究は、京都文教短期大学研究倫理審査の承認を得て実施した。

(3) 調査の内容

調査項目を以下に示す。設問③-2、④-2、⑤、⑦、⑫については自由記述による回答を求め、その他の項目については、選択肢による回答を求めた。

- ① 実習園種別
- ② 配属クラス（前期・後期）
- ③-1 部分実習の実施クラス（後期）
- ③-2 部分実習の内容・活動（後期）
- ④-1 責任実習の実施クラス（後期）
- ④-2 責任実習の内容・活動（後期）
- ⑤ 実習中にピアノで弾いた曲
- ⑥ 園から課題として出された曲数（オリエンテーション時）
- ⑦ ピアノに関する指導内容
- ⑧ 実習全体に関する指導内容
- ⑨ 保育内容に関する指導内容
- ⑩ 実習中に困ったこと
- ⑪ 実習日誌の作成枚数
- ⑫ 実習日誌作成に要した時間
- ⑬ 実習日誌のパソコンによる作成について

(4) 分析の方法

選択肢による回答は、単純集計を行い、自由記述については、筆者ら 2 名によって分類を行った上で件数を集計した。

3. 結果・考察

アンケートの回答者数は 85 名、回答率は 82% であった。各項目の結果について報告する。

(1) 実習園および配属クラスについて

学生が実習を行った実習園種別を表 1 に、配属クラス（前期・後期）を表 2 に示す。

表 1 実習園種別

実習園種別	学生数	割合
私立幼稚園	67	79%
公立幼稚園	10	12%
認定こども園	6	7%
無回答	2	2%
合計	85	100%

表 2 配属クラス（学生別）

配属クラス	前期・2 月		後期・6 月	
年少組（3 歳児）	18	21%	14	16%
年中組（4 歳児）	17	20%	19	22%
年長組（5 歳児）	12	14%	23	27%
縦割り	7	8%	7	8%
2・3・4・5 歳児	2	2%	1	1%
3・4・5 歳児	12	14%	10	12%
3・4 歳児	6	7%	1	1%
3・5 歳児	2	2%	2	2%
4・5 歳児	3	4%	5	6%
2・4 歳児	1	1%	1	1%
2・3・4 歳児	1	1%	0	0%
2・5 歳児	1	1%	0	0%
2・3 歳児	1	1%	0	0%
2 歳児	1	1%	0	0%
無回答	1	1%	2	2%
回答者数合計	85	100%	85	100%

学生の実習園は、私立幼稚園が80%近くを占め、公立幼稚園が12%、認定こども園が7%という結果であった(表1)。配属クラス(表2)は、2月実習では、3歳児クラスと4歳児クラスに配属された学生が、それぞれ20%程度であり、6月実習では、5歳児クラスが27%と最も多い。2月と6月は、幼稚園の一年の中で、クラスの雰囲気や子どもの発達の様子が大きく異なると考えられる。2月の3歳児は、幼稚園での生活に慣れ、様々な習慣が身に付いた頃であり、自分で出来ることが増え、子ども自身が楽しさを感じられる時期である。また、4歳児は間の学年であることから、落ち着いて様々な活動に取り組めるようになる。一方、5歳児は、卒園が近づき、行事への準備も含めて活動が活発化し、毎日がめまぐるしく過ぎていく時期となる。このような状況を考慮に入れ、幼稚園としては、1年次後期の初めての幼稚園実習では、比較的落ち着いたクラスの中で、学生が観察を行い、子どもたちとの毎日を楽しくするようとの配慮から、3、4歳児クラスに配属するケースが多いと推測できる。2回目となる6月の実習では、責任実習等、実習生が主体となって活動する場面が増えるため、園生活の中で安定し、様々な活動に期待感をもって取り組む5歳児クラスで、実習生自身が計画した保育を展開できるよう考慮している園が多いと考えられる。このように、一つのクラスで10日間を過ごすケースも多いが、2月、6月ともに、2歳児クラスを含めて複数の年齢のクラスで実習を行った学生も20%以上に上った。各年齢の発達段階や興味・関心等の違いを感じられるように考慮されていると考えられる。

(2) 部分実習・責任実習の内容について

後期(6月)実習で行った部分実習の実施クラスを表3、内容を表4に示す。また、責任実習の

実施クラスを表5、内容を表6に示す。

表3 部分実習の実施クラス(後期)

配属クラス	回答数	割合
2歳児	3	4%
年少組(3歳児)	18	21%
年中組(4歳児)	24	28%
年長組(5歳児)	34	40%
縦割り	5	6%
実施なし	3	4%
無回答	3	4%
合計	90	

※回答者数は82名、割合は回答者数に対するものである。

表4 部分実習の内容・活動(後期)

内容	回答数	割合
歌	8	10%
ピアノ	9	12%
手遊び	9	12%
絵本	53	69%
製作	16	21%
エプロンシアター	4	5%
ゲーム	3	4%
紙芝居	1	1%
朝の会、給食、帰りの会等の進行	7	9%
小話	1	1%
合計	111	

※回答者数は77名、割合は回答者数に対するものである。

表5 責任実習の実施クラス(後期)

配属クラス	回答数	割合
年少組(3歳児)	17	22%
年中組(4歳児)	23	30%
年長組(5歳児)	24	31%
縦割り	7	9%
実施なし	5	6%
無回答	8	10%
回答数	84	

※回答者数は77名、割合は回答者数に対するものである。

表6 責任実習の内容・活動（後期）

内容	回答数	割合
製作	57	80%
新聞遊び	5	7%
ゲーム	3	4%
運動遊び	3	4%
エプロンシアター	1	1%
クイズ	1	1%
ダンス	1	1%
その他	3	4%
回答数	74	

※回答者数は71名、割合は回答者数に対するものである。

表3、表5より、部分実習、責任実習ともに配属クラスの傾向は、(1)で述べた6月実習の傾向と同様であった。ただ、部分実習を経験しなかった学生が3名、責任実習を行わなかった学生が5名いることが明らかとなった。今年度の6月実習は、新型コロナウイルスの影響により、実習生に十分な経験をする機会を設けられなかった場合もあると考えられる。また、学生の実習に対する姿勢や取組によって与えられる機会が異なってしまう場合もあるであろう。しかし、同期間、実習に参加するにあたって、学生によって実習内容が大きく異なることは望ましくない。教育実習Ⅱに向けては、学習内容に関して実習園への協力を求めることも今後の課題と考えられる。

表4より、部分実習の内容として、絵本の読み聞かせが53件であり、学生の70%近くが経験している。自由記述の内容からは、読み聞かせをほぼ毎日行っている学生も複数あり、読み聞かせの場面は、帰りの会が多いということが分かる。また、空き時間に急に指示をされて行うというようなケースも見受けられた。絵本を使った活動を経験することは貴重であるが、保育においては、計画性が重要であり、実習にお

いてもその意識を明確化できるような指導が期待される。次に多かった活動は、製作で16名、手遊び、ピアノがそれぞれ9名であった。自由記述の内容から、製作では、てるてる坊主、かたつむり作り、紙コプター等、比較的短い時間で作成できるものが多かった。責任実習では、製作が57件（80%）であり、他の活動と比較して大きな割合を占めている。七夕や梅雨など、季節を意識した活動を取り入れようとする意図から、製作の活動が多くなった可能性もあるが、学生は、大学で経験した内容を実習でも行う傾向があることが先行研究でも指摘されている（福山・大塚・田中、2013；田中・坂喜・鈴木・飯塚・芳賀、2018）。従って、今回の結果も、保育内容に関する科目や指導案作成の学習時等に大学で示した例が製作に偏っていたことによる可能性も否めない。今後は、音楽や運動遊び、身体表現等、幅広い活動を展開できるよう、大学で示す事例についても検討していく必要がある。

(3) ピアノに関する活動と指導内容について

学生が実習中にピアノで弾いた曲を表7に、オリエンテーション時に、園から課題として出された曲数を表8に、ピアノに関する指導内容を表9に示す。

表7 実習中にピアノで弾いた曲

種類	回答数	割合
童謡	42	16%
季節の歌	22	8%
新しい子ども向けの歌	51	19%
遊び歌	13	5%
生活習慣の歌	101	39%
宗教関連の歌	31	12%
その他	2	1%
合計	262	100%

表8 園から課題として出された曲数
(オリエンテーション時)

曲数	回答者数	割合
1 曲	2	2%
2 曲	4	5%
3 曲	9	11%
4 曲	5	6%
5 曲	21	25%
6 曲以上	24	28%
10 曲	1	1%
なし	19	22%
合計	85	100%

表9 ピアノに関する指導内容

内容	回答数	割合
止まらない	13	15%
テンポ	4	5%
1 曲最後まで弾けるように	2	2%
歌い続ける	2	2%
歌い始めの指示	2	2%
簡易伴奏可	2	2%
落ち着いて弾く	2	2%
子どもの顔を見ながら弾く	2	2%
歌いながら弾けるように	1	1%
歌詞の先読み	1	1%
子どものペースに合わせる	1	1%
自信をもって弾く	1	1%
前奏を弾く	1	1%
ペダル踏み方	1	1%
毎日弾く曲は完璧にする	1	1%
練習量	1	1%
その他	5	6%
特になし・無回答	43	51%
合計	85	100%

表7より、学生が実習中に弾くピアノの曲は、多岐に亘っていることが分かる。最も多いのは、おはようの歌、おとうさんの歌等の生活習慣に関する歌（39%）であった。次に「にじ」「すて

きなパパ」等、リズム感のある新しい子ども向けの歌が19%であり、「うさぎとかめ」「きらきらぼし」等の童謡が16%であった。また、「マリアさまのこころ」「ねね、ほとけさま」等、キリスト教保育や仏教保育を行っている園での曲が12%であった。これらの宗教関連の歌を挙げている学生は、他の学生に比べて多くの曲数を弾いた傾向が見られた。

表8より、学生がオリエンテーション時に課題として与えられた曲数には大きな開きがあることが明らかとなった。課題が与えられなかった学生が22%いるのに対して、6曲以上の曲が課題となった学生も30%近くいることが明らかとなった。実際に学生から、ピアノで弾かなければならない曲が多すぎて、他の教材研究に手が回らないといった意見も聞かれた。実習園によって、学生の経験や負担が大きく異なることがないよう、大学側から実習園に依頼をすることも今後の検討課題となるであろう。

表9より、ピアノに関して指導を受けた学生は約半数であった。止まらずに続ける、テンポに気を付ける、子どもの様子を見ながらベースに合わせて弾く等、ピアノが得意でない学生に対して、子どもの視点から、気持ちよく歌えるよう、きめ細かく具体的な指導が行われていることがうかがえる。

(4) 実習での指導内容について

オリエンテーションや実習中に園で特に指導を受けた内容：心構え・心得・決まり事を表10に、保育内容に関する指導内容を表11に示す。

表 10 実習全体に関する指導内容

指導内容	回答数	割合
挨拶	39	54%
礼儀	24	33%
服装	35	49%
言葉遣い	30	42%
身だしなみ	23	32%
提出物の期限厳守	41	57%
守秘義務	40	56%
その他	5	7%
合計	237	

※回答者数は 72 名で、割合は回答者数に対するものである。

表 11 保育内容に関する指導内容

指導内容	回答数	割合
実習日誌の書き方	53	65%
指導案の立て方（書き方）	48	59%
教材研究：指導実習における製作の取組	44	54%
教材研究：年齢に応じた活動であるかどうか	42	51%
教材研究：素材を何にするか	32	39%
教材研究：保育の進め方	43	52%
絵本の選択：年齢に応じた絵本	16	20%
絵本の選択：指導する内容に応じた絵本	11	13%
絵本の選択：読み聞かせ技術	24	29%
その他	1	1%
合計	314	

※回答者数は 82 名、割合は回答者数に対するものである。

表 10 より、オリエンテーション時や実習中に受けた指導については、挨拶、提出物の期限を守ること、守秘義務について等、実習で最も基本となる点が多く指導されている。この他の内容についても、学内での実習指導で繰り返し学習している内容が改めて押さえられていることが明らかである。

保育内容に関する指導（表 11）では、実習日誌の書き方（加筆や修正）についてが最も多く 65% であった。次いで指導案の立て方（書き方）、教材研究：製作の取組方、年齢に応じた活動かどうか、保育の進め方等が 50% を超えている。6 月は、2 月の観察実習と異なり、学生が自ら考え、計画して実践するという活動が多く、その一連の流れに関連した指導が多く行われていると考えられる。

(5) 実習中に困った事柄について

学生が実習中に困った事柄について表 12 に示す。

表 12 実習中に困ったこと

実習中に困ったこと	回答数	割合
実習日誌の書き方	39	46%
指導案の立て方（書き方）	47	56%
手遊び：方法、レパートリー	48	57%
教材研究：指導実習における製作の取組	39	46%
教材研究：年齢に応じた活動であるかどうか	43	51%
教材研究：素材を何にするか	23	27%
教材研究：保育の進め方	50	60%
保育中のメモの取り方	14	17%
回答数	303	

※回答者数は 84 名で、割合は回答者数に対するものである。

表 12 より、学生が実習中に困った事柄として最も多かったものは、教材研究：保育の進め方について（60%）であった。また、指導案の立て方（書き方）（56%）、教材研究：年齢に応じた活動であるかどうか（51%）も関連した事項である。子どもの姿や様子、発達段階を考慮しながら進めていこうという思いが、難しさを感じることに繋がっていると推測できる。また、指

導案を立てたものの、それが自分のものになる前に実践している可能性もある。簡単な指導案でも良いので、流れをしっかりと掴み、準備を整えて実践することの重要性を改めて学生に伝える必要がある。また、手遊びの方法やレパートリーについても 57% という結果であった。大学の授業でも教員から手遊びを紹介したり、模擬保育を行う中でお互いに新しい手遊びを紹介し合ったりしているが、実習中には手遊びが必要となる場面が想像以上に多く、新しい手遊びを知ることや工夫して実践することの必要性がうかがえる。

(6) 実習日誌について

実習日誌の作成枚数を表 13 に、作成時間を表 14 に、パソコンでの作成について表 15 に示す。

表 13 実習日誌の作成枚数

枚数	回答者数	割合
1 枚	13	15%
2 枚	40	47%
3 枚	30	35%
4 枚以上	1	1%
無回答	1	1%
合計	85	100%

表 14 実習日誌作成に要した時間

時間	回答者数	割合
1 時間以内	3	4%
1 ～ 2 時間	16	19%
2 ～ 3 時間	27	33%
3 ～ 4 時間	24	29%
4 ～ 5 時間	10	12%
5 時間以上	3	4%
合計	83	100%

表 15 実習日誌のパソコンによる作成

	回答者数	割合
作成したい	66	79%
手書きが良い	16	19%
スマホで作成したい	1	1%
どちらでも良い	1	1%
合計	84	100%

表 13 より、1 日あたりの実習日誌の作成枚数は 2 枚が最も多く 47%、次いで 3 枚が 35% であった。表 14 より、作成に要した時間は、学生によって差があり、2 時間以内の学生が 22% あるのに対して 4 時間以上かかっている学生も 16% と少なくなかった。渡邊・戸川（2016）が実習生を対象に行った調査では、実習生の実習記録に費やす時間の平均は、3.5 時間であることを踏まえると、4 時間以上という作成時間は長いと言えるであろう。また、渡邊（2021）では、幼稚園の管理職およびクラス担任に対して日誌の適当だと思ふページ数について尋ね、回答の平均は A4 で 2.43 枚であったことが報告されている。本学の学生の日誌の様式は、A3 であり、3 枚以上記述している学生も多い。実習日誌の作成に多くの時間を費やすことは、次の日の活動にも影響を与える可能性があるため、今後は、様式の改善や、出来るだけ簡潔に必要な内容をまとめられるよう指導の工夫が求められる。また、短い時間で作成を終えている学生は、園での休憩時間に記述させてもらっている可能性もあり、今後調査しておく必要があるだろう。

さらに、表 15 より、パソコンでの日誌作成について前向きに考える学生が 80% 近くいることが明らかになった。現場では、多くの業務がパソコンで行われていることや、本学においても来年度入学生よりパソコンが必携となる状況を踏まえても、従来の手書きによる日誌や指導案

の作成からパソコンでの作成に移行することが望ましいと考える。在学中に作成のスキルを確実に習得させることが出来れば、実習生の負担軽減となり、教材研究に使う時間の確保にもつながると考えられる。また、現場で一人一台のパソコンが普及している園においては、指導者の教諭がパソコン上で添削を行うことも可能であり、指導者の負担を軽減できる可能性もある。

4. まとめと今後の課題

本研究では、幼児教育学科2年生を対象にアンケートを実施し、実習中における学生の学びや活動について調査した。その結果、いくつかの課題が見出された。

一つ目に、実習園によっては、学生が観察・参加・指導する実習の内容が異なっている点である。園の事情で、部分実習や責任実習を経験させてもらっていない学生もいることが判明した。また、オリエンテーション時に与えられるピアノ曲目数と内容にも大きな差があることも明らかとなった。実習生の受け入れは、幼稚園側にとって大きな労力を要するものであり、養成校側から実習内容や方法に関して、細かい要望を出すことは難しい現状がある。しかし、どの学生も一定の経験ができるよう、2月実習、6月実習でそれぞれ経験させたい学びについて、大学からある程度の指針を示す必要がある。

二つ目に、多くの学生が、実習日誌の作成に長時間を要していることである。実習中に観察した内容を記録することは、学生の書く力を向上させ、実践力にもつながることは言うまでもない。しかし、実習時間に加えて通勤時間もあり、帰宅後も深夜まで実習日誌の作成に追われることは、学生にとって過度な負担となることが懸念される。鈴木（2016）は、幼稚園実習での学生の出勤・退勤時刻、日誌作成に要する

時間を調査し、日誌作成に費やす時間の長さ、日誌を含めた厳しい指導が保育者を職業として選ぶことへの躊躇につながる可能性を指摘している。今後、幼稚園にも助言を求め、実習日誌を簡潔に作成できるよう、幼稚園と養成校が連携して、様式や指導方法の改善を行っていく必要がある。

さらに、今回は調査していないが、実習園での休憩時間の扱いや保育以外の活動内容についても確認しておく必要がある。事後指導での学生との面談を通して、園への出勤時間や退勤時間に差があること、休憩時間がとれていないと感じている学生が多いことがうかがえる。園側は、保育終了後の作業で、学生が自由に行動できる時間を作り、休憩を兼ねたものとしている場合も多い。しかし、学生は、休息と意識していない場合もあるため、休息の時間を設けていることを学生に明示していただくよう、園に依頼することも必要と考える。

また、保育以外の活動として、学生に行事の準備や制作、壁面、保育で使用する教材等の作業を任されることがあるが、それを負担に感じている学生も見受けられた。学生に作業を指示する際には、その作業の目的や保育への繋がりを知らせ、学生自身がその活動にやりがいを見出せることが重要である。さらに、それらの教材等について、実習期間中に完成や出来映えを求められることもあるが、学生による個人差も大きいのが現状である。学生が自分に不足している力に気づき、求められるレベルに到達しようと努力することは重要であるが、過度な負担や不安につながらないよう活動量や内容を検討することが求められる。実習園には、このような点を丁寧に伝え、学生が楽しさを感じながら実習ができるような配慮や指導の協力を得たいと願う。

今後も調査を継続し、学生からの声、現場からの声を真摯に受け止めていきたい。授業での学習と現場での体験が相互に関連し、学生にとって質の高い学びとなるために、実習園との連携が極めて重要であると考ええる。

引用文献

- 福山多江子・大塚良一・田中浩二（2013）幼稚園実習のスキルと責任実習での傾向と課題（その1）、東京成徳短期大学紀要、46、39-47.
- 文部科学省（2005）中央教育審議会、今後の教員養成・免許制度の在り方について（中間報告）：(1) 教職課程の改善・充実
- https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1396684.htm（2022.9.30 参照）
- 鈴木 隆（2016）幼稚園教育実習のあり方について－実習調査から読み取る実習の実態－、立教女学院短期大学紀要第、48、69-80.
- 田中公一・坂喜美佳・鈴木純子・飯塚有紀・芳賀 哲（2018）効果的な教育実習指導の検討：教育実習Ⅱ事後アンケートと自己評価の分析を通して、仙台青葉学院短期大学研究紀要青葉、9、123-132.
- 渡邊 望・戸川 俊（2016）実習生から見る幼稚園実習の実際と課題、保育文化研究、3、45-59.
- 渡邊 望（2021）教育実習（幼稚園）の現状と課題－21世紀型資質・能力を培う保育に向けて－、こども学研究、3、23-34.

